

新島研究の課題

今谷逸之助

新島先生についてはすでに多くの著書がでてゐる。たとえば A. S. Hardy, *The Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* を始め、デビス、根岸、徳富、湯浅、魚木、森中、岡本、岩本の諸氏その他の方々によってほとんど書き尽された感がある。そのうえ、森中氏編集の新島先生詳年譜は有力な伝記資料である。さらに新島先生自身によって書かれた *My Younger Days* 日誌、そして大量な書翰集、これらは何れも新島伝の一部に数えられる。雑誌「新島研究」に発表せられた先生の説教および諸文章なども先生の伝記の資料である。

さて、以上をもつて新島先生についての知識は尽され、先生について研究する材料はなくなるであらうか。そうとは思われない。今迄の伝記類に現われたものは、言わば先生の生涯の表面の記録が多く、先生の内的生活の発展、先生の生活の意味ということになると今後の研究に待たなければならぬことが多いと思われる。とくに私は言わば「使徒行伝」とも言うべき、先生の弟子達に対する研究によって、逆に先生の思想や精神を溯つて把握すべきであるまいかと思う。

しかし若き先生の人格形成に与つた板倉家の家臣、函館における福士、沢辺、ニコライなどの諸氏の維新前の在り方などの考察は無

視できないし、米国へ危険を冒して連出したセボリー、テイラーの二船長と、一年余にわたる東洋諸港に立寄つた船の生活についてのわれわれの知識も充分ではない。先生は在米十年に涉り、恩人ハーデー氏夫妻から心身両面の援助を受けて、クリスチャンとしての生涯の方向が決定せられた。わけてもアーモスト大学のシーリー教授による学問、信仰画面の感化、並にその後のアンドーバー神学校におけるパーク教授ほかの神学思想が新島先生の信仰形成に与えた意味なども未だ充分明らかではない。しかし、これらの米国の諸友との接触の実体については断片的ながら手紙、新聞、雑誌などにおいて探し出すことができる。

アメリカンボードの機関誌、ミッショナリー・ヘラルドにも、私の瞥見しただけでも、シーリー教授の書いたもののほかに新島先生が報告した記事などが存在する。

さらにシーリー教授一家と新島先生との間に交換された書翰の原文が、すでに「基督教研究」にオーティス・ケリー教授によって発表されている。これは今後も発表されることを期待したい。ここでは新島先生の信仰的側面に焦点を絞つて若干のことを述べて見たい。興味深いのは内村鑑三氏と新島先生との深い関係がこの書翰に見出されることである。内村氏の武士道的基督教は新島先生の基督教把握と類似するところがありはしないかを私は想像する。

私はここで述べることはできないが、内村氏を産出したクラーク先生のいわゆる札幌バンドの宗教精神とアーモスト大学の宗教的雰囲気との関係と言うものすら一考するに値する問題でないかと思う。

新島先生は熊本バンドの人々を弟子として、日本の宗教界に大い
い貢献をしたが、札幌バンドは内村鑑三氏によって特異な発達を遂
げたと考えられる。さらに横浜バンドを育成したS・R・ブラオン宣
教師が、アーモスト大学出身者であり、新島先生がアーモスト大学
の学生であったとき、帰省したブラオンがアーモストを訪ねて、面会
し、日本伝道について語り合っていることを思うとき（高谷道男氏
談）私は新島先生を育てたアーモスト大学というものが、札幌、横浜、
熊本という日本の新教運動の発生に悉く関係があると考えざるを得
ない。将来新島先生の伝記が書かるべきであるならば、新島先生の
信仰内容が、先生の数多くの先生達を通して研究さるべきであると
同時に、先生の同労者であった神学者のデビス教授の神学思想、ラ
ーネット・ドーン教授のキリスト教思想および熊本バンドを作っ
たゼーンス校長の思想などを省察し、その思想を継いで同志社にき
た小崎弘道、宮川経輝、海老名弾正、金森通倫氏などの思想を精査
することによって、また、それとの比較によって、新島先生の信仰
というものが、浮彫にされるということもあるのである。私は最近、
熊本バンドの一人森田久万人氏の思想を調べることによって、新島
先生と基督教的に関係の深かった人物、そしてアーモスト大学と親
近関係のあるウィリアムス大学の総長、マーク・ホプキンス博士の
思想の影響を森田氏が受けたことを知った。ところが、このマーク
・ホプキンス教授こそ、新島先生が蛭雪十年の留学を終って、バー
モント州ラットランドのアメリカン・ボード年会において、宣教師
補佐の按手礼を受領したときの年会議長であった。しかも、新島先
生が一八八五（明治十八）年に再度渡米した際、基督教大学設立趣意

書の推薦書を書いたのがこのホプキンスであった。（オーティス・
ケリー教授、新島とシーリー「基督教研究」第三十卷第三号参照）そ
して、この教授の著 *The Law of Love and Love as a Law or*
Christian Ethics, 1875. は当時同志社でよく読まれたのである。

（今谷、森田久万人の哲学Ⅱ「キリスト教社会問題研究」第七号参照）
かくて森田久万人教授のホプキンスの思想理解から、逆に新島先生
の信仰の確認もまた可能であると私は思うのである。私の見るところ
ではゼーンス校長の言うならば自由主義神学で育てられた熊本バ
ンドの人々の信仰に比して、新島先生の信仰というのは、オーソド
ックスなものと考える。そしてそれを証明することは困難でないが、
しかも、なお共通なところも見出され得るのである。かくて、新島
先生の今後書かるべき伝記は、ひとり先生の信仰の側面だけを考え
ても、深さが加えられるべきである。

さらに、先生の日本教育に対する貢献という面を考えても、例の
文部理事官田中不磨氏によって代表される欧米教育制度の視察記
たる「理事行程」十五巻における新島先生の寄与を克明に調査、再
評価し、それを先生の伝記に附記すべきであろう。何れにせよ、先
生の伝記の表面的な方向は或る程度紹介されたと考えられるが、
その内面的深さ、明治文化史に与える意義については今後記録され
なければならない。先生の生きていた時代が、日本未曾有の風雲時
代であり、先生の交友は、改革日本の創造者達であった——例えば
森、木戸、大隈、井上、板垣、勝などであった——ことを考えても、
新島研究はこれからなされなければならないと思われる。

欧州旅行の印象

吉川 秀造

昭和三十七年度の在外研究員を命ぜられて、八月六日神戸を出帆、途中アデン・エジ



オスロ大学（ノルウェー）

プトなどに立ち寄り、九月十日ハンブルグに上陸、それからデンマーク・スエーデン・ノルウェー・イギリス・フランス・ベルギー・オランダ・ドイツ・スイス・オーストリア・イタリア・スペイン・ポルトガルを廻つて、十一月二十八日アメリカへ渡り、二、三の主要都市を訪問して、十二月二十五日無事帰京することができた。短期間に余り多くの国を廻つたため、印象が大変浅薄になったが、自分の専攻に関すること以外にも、色々貴重な見聞を得ることができた。ここではそのうち欧州旅行で得た断片的な感想の二、三を述べてみたいと思う。

美しい市街

私が上陸後最初に北欧諸国の都市を訪れて先ず最も強く受けた印象は、市街が非常に美しいことであつた。単なる家屋や街並の美観というだけでなく、これらを含めて、街全体の清潔と調和ということである。この感じはその後の諸国の都市を廻つてみて、どこも皆同様であることを知った。例えば街路にしても、どこを通つても殆んど紙屑や塵芥の落ちていないところはなく、商店街を通つても実に整然としていて、わが国のように

平気で商品を道路にまではみ出して並べているような店はない。アパートにしても窓という窓には、みな草花を植えた鉢が並んでいて、おしめや洗濯物をブラ下げた家などはついに見受けなかつた。尤もパリやニューヨークのような大都会になると、必らずしもそうとは言えない点もあり、表通りは清潔でも裏通りに入ると塵芥や紙屑の落ちてゐる所もあり、特に驚いたことは、一日パリの町を歩いて、有名なセーヌ河畔の散歩道へ降りようと思つて階段を降りたところ、いたるところ放尿のあとだらけで悪臭鼻を掩うばかり、早々にして上に上つたことであつた。更に私の腕に落ちないことは、パリ名物の街頭喫茶店であつた。いたるところカフェとかバーとかレストランとか、名前は色々だがどれも皆歩道の上に店を突き出して椅子を並べて客を収容しており、客は道行く人を眺めながら、茶を飲んだり食事をしたりしている。畢竟歩道が概して非常に広いからでもあろうが、大変な交通妨害である。このような特権が喫茶店にだけ許されている理由が私には分らなかつた。普通の商店も道路にはみ出して商品を並べている店が、多く目についたが、このようなこと

は他の諸国には余りなかったことである。花のバリも文句をつければ色々あるが、何といつても矢張り最も美しい都市の一つであった。この外この都市へ行つても、市街に電線・電柱のないことが、どれほど市街の美観を助けているか分らない。特にハリなどには立派な並木通りが沢山あって、町に美観を添えているが、このような立派な並木が育つのも電線などの邪魔物がないからである。日本などの速製文化都市と異なる点の一つであらう。

完備された道路

次に日本に比べて町の騒音が大変少ないことも、羨ましいことの一つである。オートバイやバイク付自転車は非常に少なく、偶々見かけても日本のように野蛮な爆音を立てて、町を走って行く雷族などは全くいなかった。これが町の騒音の減少に非常な助けとなっている。デンマークやオランダは非常に自転車の多い国で、二人に一台は所有しているといわれるだけに、主要道路には特別に自転車道が設けられており、老若男女とも沢山の人が自転車に乗っているが、皆足踏みか静かにモーターを走らせている人ばかりで、人々

はいかにも自転車の乗用を楽しんでいるかのように見えた。特に朝夕のラッシュアワーに、多くの通勤者が皆自転車に乗って、一列に進行している有様は一の盛観であった。

日本から行った人は一様に感歎するところであるが、道路の完備していることは全く羨しい限りである。舗装道路の普及は各国とも非常なもので、一、二の国を除き殆んど百パーセント近く行き渡っているように思われた。スイスでチューリッヒからジュネーブまで、イタリアでミラノからヴェニス・ローマ間を汽車で旅行したが、その沿線は山や畑の続く田舎道でも舗装が行き届いており、舗装のないのは畦道だけでも言うほどであった。特に有名なドイツのアウトバーンのことはかねて承知していたが、デュッセルドルフからボンまで実際に走ってみて、そのすばらしさに驚歎した、三車身づつの往復道路が坦々として続いており、スピードの制限は一切ない。このような道路がドイツ国内の主要都市を縦横に連絡しており、現在でも、まだ、建設が続けられているとのことであった。このような有様を見ると、日本は相当の国力を有し、文明国の仲間入りしてから相当の年月

も経ちながら、為政者は一体今まで何をしていたのかと、一種の腹立たしさを覚えたことである。

二階式バス

交通機関が比較的混まないことも羨ましい。欧米の都市ではだんだん市街電車が姿を消して、バスや地下鉄に地位を譲りつつあるようであるが、私の経験したところでは、どの都市でも比較的らくに乗ることができた。特にロンドンの地下鉄の完備していることは驚歎の至りである。延長七二キロに亘り七つの路線が四通八達しており、停留場によっては上下のエスカレーターが三段になっているところもあり、最も深い所では六〇米の地下を通っているという。ラッシュ時にも乗ってみたが、相当すいていた。名物の二階式の赤バスも、定員以上には乗せないで、混むことは決してなく、バスは次から次へとやって来るので、長く待つことはない。地下鉄と共に London Transport の運営だが、これで経営が成り立つとすれば、日本の交通事業も大いに研究の余地があると思った。尤もイタリアでミラノからヴェニスまで乗った汽車は、日本の車輛より遥かに劣るきたなさで、混雑

は日本の列車と同様であった。序でながらウィーンで気付いたことであるが、ウィーンでは交通頻繁な数カ所の交差点に地下道があり、四方に出入口があつて、地下は商店・食堂街になっていることは日本などと同様であるが、地下道にはどこにも上り下りのエスカレーター設備があるのには感心した。折角地下道を設けてもここまで行届かねば、大して交通の緩和にはならないであらうと思つたことである。

東ベルリン

訪問した諸国の都市の中でベルリンの印象だけは一寸別であつた。世界一を誇るテンペルホフ飛行場の規模は、さすがに目を見張るものであつたが、ここからホテルまでのタクシーから見た西ベルリンの市中は、爆撃にあつた半壊の建物が残つており、空地も多く見かけられた。このような状況は東ベルリンも同様であり、東西ともにベルリンの戦禍からの回復は程遠いものを感じた。建物の廃墟は至る所にあり、大きな建物ほど壊れたままで、人も住まずに打ちすててあり、壊れた建物の一階だけを修理して、店を出したり住宅にしている家も甚だ多い。空地が至るところに多

く、さすがに瓦礫だけは片づけられていたが、草が茫々と生え茂つていた。もともと修繕中のものもあり、新しい建築物もほとんど建てられてはいるが、戦火の跡を止めなくなるのはまだ随分先のことであらう。十年以前の東京・大阪というところであらうか。潜在中外国人だけの東ベルリン行のバスに乗つて、東ベルリンに行つたが、東ベルリンへの関門であるポツダム広場に行くと、道の真中に突き出された遮断機に続いて、更にコンクリートの低い垣があり、この手前でバスを止められて、旅券の検査、所持金の申告をさせられ、また旅行小切手はバスの車掌に預けさせられた。これを終つていよいよ東ベルリンの境域に入ると、やはり同様のコンクリートの垣の次に遮断機があり、これを越えると漸く東ベルリンである。西ベルリンへ帰る時も同様の手続をふませられる。西ベルリンへ帰つてから、東西ベルリンの厳重な境界線を見たが、道路の東ベルリン側には高い塀がめぐらされ、その上にバリケード、鉄条網が張りつめてあり、その並びに建っている建物はすべて空家で、家の入口や窓という窓は全部コンクリート・ブロックで埋めつぶされ、蟻の

はい出るすき間もない。家そのものが塀の代りをつとめているわけである。所々生えている樹木の上にはやぐらが組まれて、その上に銃を持ったソ連兵が見張りをしていた。境界線の街路の所々に花輪をそなえた標木が立てられているのは、東ベルリンからの越境が見つかつて、その場所で射殺された人を弔うためのものと聞かされた。一昨年の八月十六日以来このように東西ベルリンは完全に遮断されてしまつて、まるで戦争前夜の光景である。東西両ベルリンに分れて住んでいた親子兄弟も、この時以後、一切往来ができなくなつた。民族の悲劇とも言ふべきものを痛感した。併しこの境界線附近から一歩市中に入り込めば、このような緊張感はあることなく、平和的な雰囲気を感じられた。西ベルリン第一の繁華街たるフュルステンダム通りは、立派なホテル、レストラン、商店が花やかに軒を並べ、広い歩道にはガラス張りの商品陳列箱が並んでいる。東ベルリンの街も、商店も多く店を開いており、店には物資も豊富らしく、道行く人の服装もそれほど見すばらしい人は見かけられなかった。まずまず中級の都会なみの状態である。併しかつてのベルリン第一の繁



マドリード大学（ポルトガル）

華街であつた、ウンター・デン・リンデンの大通りは淋れ果てていた。

スペインとポルトガル

欧州で最後に訪問したのはスペインとポルトガルであつたが、この両独裁国の印象もまた相当異つたものであつた。これら両国は他の諸国に比べて統制が行き届いていて、物価は大変安く、経済も安定しているようであり、治安は最もよく維持せられ、スペイン大使館での話では、この国の青少年の犯罪は殆んど皆無とのことであつたが、その反面、両国とも極端な警察政治が行われ、政府の批判は殆んど許されず、私を案内してくれた日本人留学生は、吾々でも分れば国外追放だが、日本語は通じないから安全ですと笑つていた。ポルトガルで、大学でも未だに進化論の講義は許されず、経済学部はあつてもマルクシズムの講義などとは思ひもよらず、何か集会があれば、警察が大学を包囲し、場合によっては構内に立入つて遠慮なく逮捕する由で、体育などの結社にも官憲の許可が必要だとのことであつた。両国とも組合はあつても、雇傭者及び労働者ともに御用組合であつて、ストライキもロックアウトも法律で禁止せら

れ、労働者の利益は全く護られていない。一日、私はポルトガルで、ペナの古城を見物のため郊外へドライブした。その途中で官憲に引率された十数人の青年が市内へ向うのに出会つたが、案内者の説明では、彼等は学生運動のために捕えられた大学生だということであつた。また、その人の話によれば、ポルトガルでは煙草のライターの所持は、外国人の他は許可制とのことで、これはマッチ産業の保護のためであり、そのためマッチは驚くほど高価である。夜おそくなると劇場、レストラン、バーなどには、必らず入口に警察官が立つており、また街角や公園の木蔭などには私服の警官が張込んでゐるのを、私は屢々目撃した。マドリードで私は一日、レテイロ公園という非常に広い美しい公園へ行つたが、平日の午前中にもかかわらず、公園のベンチには老人に混つて若い人達が、一列に目白押しに腰かけて、何をするともなく日向ボッコをしてゐたが、その無気力な表情に驚いたことであつた。これらはホンの一例をあげたのであるが、独裁国家の状況は全く驚くに堪えぬものがあつた。（商学部教授・商業史）



この不在の時代に

笠原 芳光

たとえば、ベルナル・ビュツフェの風景画に人間が描かれて

トランプの遊びのやうに、マイナスを全部あつめるとプラスになるといふことは、この世の道徳には起り得ないことでせうか。神があるなら出て来て下さい！
太宰 治「ヴィ
ヨンの妻」

いないのはどういふわけだろうか。

黒い稜線にかこまれて建物はよこたわり、鋭い枝を虚空にむけて樹木はそそりたっているけれど、人はだれひとり歩いていない。竹んでもいない。夜明け前の僅かな時間でもなければ、現実にはこのような風景はありえないであろう。風景のなかに点在しあるいはうごめく人影を画家の眼はみていなかったのか。その時おそらくビュツフェにとって重大なのは眼前の風景ではなく、心象であつた。

人間が描かれていないのは風景画だけではない。人物画においてもおなじである。それはどういう意味か。ビュツフェはおおくの人物を描き、男をかき、女をかき、道化師をかき、バレエボールをする人びとを描いた。それらの人物はきびしい筋肉の体に厳粛な表情の顔をのせ、眼はなにかを凝視しているけれど、じつはなんにも見ていない。在存がつよく主張されているにもかかわらず、そこから訴えてくるものは決定的な不在感である。ひとりの人間のまわりを空間が包囲し、ふたり以上の人間のあいだに連帯が欠如している。それは人間性を放棄した人物画である。いわゆるヒューマニティなどという甘美なものを断念し、切除しなければ、むしろ画面に人間をあらわすことはできなかったにちがいない。すくなくとも二十世紀後半のこの時代における人間を。加藤周一は『ベルナル・ビュツフェとわれわれの時代』という文章のなかで、「彼の画のなかに、はじめて、今日の人間は登場したといえる。もし人間とまでいいきらないとすれば、少なくとも今日の人間の状況である。——私は彼の人物の顔をみる。これほ

ど身につまされることはない。われわれは同じ時代に生きているのだ」と書いた。同感である。

土曜日の午後の美術館にはすくなくからぬ観覧者が絵の前にたちどまり、往来していた。ポロシヤツの青年やショート・カットの少女やなかには高名な原子物理学者夫妻の姿もみかけたけれど、それらの生きて、動いている現代の人物よりも、画中のまるで形骸のような人間のほうがはるかに今目的であるとおもわれたのはどういふわけだろうか。ピュッフェの絵画がその深刻や絶望や空虚において、われわれに共感をあたえるということは、梅雨前線が停滞していたその日の憂鬱な気象状況のせいではあるまい。それはもっと根源的な問題である。

2

人間疎外とか人間不在ということがいわれすぎてにひかしい。

人間がつくりだしたものによって人間性が奪われる疎外、人間が存在していながら、それは人間存在ではないという不在。それらがすくなくとも今日においては高度独占資本の発達に起因する大衆化状況であるという診断に誤診はないだろう。だから疎外の回復や不在の克服のための手段は、まずなによりも体制の変革であり、革命の遂行であるということになる。それもまた正しいであろう。だが問題はそこでのような人間が疎外から回復され、不在を克服した人間であるかということである。そのイメージは積極的、具体的に描かれているか。マルクシズムによれば、階級間の矛盾がうみだす闘争が、共産主義社会の実現において止揚されたときに、人類の歴史は終わり、そこから輝かしい後史がはじま

るといふ。疎外の根源を人間の生産活動のうちにとらえるマルクシズムは後史における人類の生活には、人間が人間を搾取したり人間のつくりだした物や制度や観念が逆に人間から人間性を奪うという疎外はありえないというのである。そういう社会、そういう生活はいつたいどのような状態なのだろうか。ラビ・アン・ローズとはほんとうはそういう人生を指すのだろうか。

だが、そのイメージが薔薇色であればあるほど、われわれにとつてねがわしく、慕わしくおもわれ、同時に、空想的に、また空虚に感じられてくる。それはマルクシズムが虚偽であるということではないだろう。疎外されていない、明確な存在としての、ほんとうの人間というものは、まだ言葉や概念や理想像があるだけで、いちどもあらわれたことがないからである。

たとえば自由という概念があり、自由な人間というイメージがある。しかし、自由であるということはどういうことだろうか。

「わたしはいま自由だ」といえば、それは忙しき仕事がないということであり、人とあう約束をしていないということであり、あるいは人間関係の束縛のなかにいないということである。思想の自由や言論の自由ということは思想や言論を制約したり、統制したりしないということである。自由はつねになにものかからの自由である。それは同時になにごとかへむかう自由でなければならぬとはいふことができるが、しかしそのような積極的な自由を具体的に表現しようとするとき、われわれは当惑せざるをえない。自由な人間、ほんとうの人間というものは未来に対する願望であり、希求であるが、それがいかなるものであるかという

ことをわれわれはまだ把握することができないのである。

マルクシズムのように、それを未来に托するということに虚無を感じるという人は、しばしばそのイメージを過去に逆行させて考えてきた。人間の原型がすでにあつて、いまは失われているのだから、それをとり戻さなければならぬというのである。しかし、原型を過去にもとめるためにわれわれはどれくらい歴史を廻ればよいのか。近代へ中世へ古代へ、さらに原始へ。それは、ついに、ピテカントロプスから類人猿への系列でしかない。およそ昔はよかつたとか、死者は美しいという思想は人類の歴史とともに古いというべきであろう。紀元前三世紀のギリシアの哲学者であつたテオフラストスは『カラクテレス』という本のなかに「この頃の人間は昔にくらべてひとが悪くなつた」と書いている。これはおどろくべきことのようにあつて、じつはあたりまえのことなのである。

3

人間はまだい子ども完全に自由な、ほんとうの人間であつたことはなく、これから、そして永遠にないだろう。

人間における不在や疎外や不自由や欠如、それらは量的には回復され、克服されなければならない。しかし質的な意味においては、むしろ、それらは人間のしるし、人間の条件ではないだろうか。そこでは人間における消極的な、否定的な、マイナスの要素が、むしろ、それらがあるゆえに人間であるということが成立しているのではないだろうか。ほんとうの人間とはなにか。ほんとうに自由な、完全な人間になりたいとねがいつつ、不自由で不完

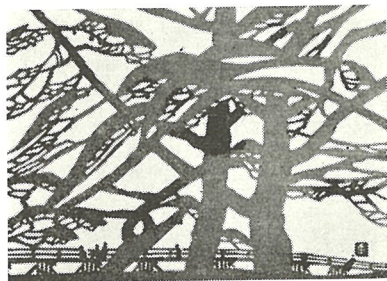
全な人間でしかないわれわれを、むしろ、これこそ人間における自由であり、完全であるというふうに考えることはできないか。欠如を埋めて充実をはかるのではなく、否定を消して肯定をもたすのではなく、マイナスをとりさつてプラスにするのではなく、欠如や否定やマイナスをそのままにしながら、それらを生かす途において、そこに人間をうかびださせることはできないだろうか。

それは単なる現状肯定や体制維持ではない。むしろその反対である。現状打破や体制変革の因子を、前進や、向上や、エネルギーにのみもとめてきたことが、人間を生かすことに必ずしもなっていないかつたという僅かな反省がある。そこでは後退や、下降や、非エネルギーからもささやかな知恵をくみとることができないものか。これはあるいはひじょうに危険なことである。しかし人間におけるネガティブな要素を抑制し、廃除し、圧殺することが人間を生かす途だと考えることはさらに危険なことであろう。悪には悪の意味があり、ニヒリズムにはニヒリズムの効用がある。悪やニヒリズムにその場所をあたえることは、むしろそれらを増長させたり、絶対化させたりしないために必要なことではないか。不在も、疎外も、不自由も、欠如も、悪も、ニヒリズムも、それらすべては根源的な意味で人間におけるマイナスの札である。マイナスの札を集めていくとどうなるだろう。マイナスを全部あつめるとあるいはプラスに変わるといふことがあるかもしれない。そういう保障があれば、いや保障がなくても、われわれはそこに賭けるほかはない。この不在の時代に。

(大学、宗教主事)

吸 取 紙

正
木
亮
二



同志社に勤務してかれこれ十年になろうとしている。編集部から、何か書けと言われたので、のっぴきならぬ思いでペンを走らせるわけだが、このような文章は誰の目にも触れないでほしいとひそかに念じている。

これは大学を出て、東京の出版社に勤めていたころの二三の印象記だが、言ってみれば、インキの跡もうすれた古い吸取紙のようなものである。

宇野浩二のこと

昭和二十四、五年のころ。啄木全集の仕事に携わっていた私は、

解説依頼の件で本郷の宇野浩二の家を訪ねた。変哲もない格子戸の門をあけて玄関まで二間ほど。木造の古い家だ。案内を乞うと、五十がらみの女の人が出て来た。表情の少ない人で、来意を聞くに辺りはひどく暗かった。目が馴れてくると二畳ほどの玄関の間の正面に、額縁に収まった複製の大きな絵がぼんやりと浮かびあがってきた。それはイタリア・ルネサンス期の画家ボッティチエリの『春』だった。この上なく優美な裸足の女神達の姿が暗さの中で辛うじて認められるのだったが、両手でやっと持てるほど大きいこの絵のあることが、戦災を免れた古い東京の宇野浩二の

家には何かひどく不釣合なものに感じられた。向かって左手に廊下が見えたが、その方に書斎があるのだろう。宇野浩二はきつとそこから現われるのだろう。そんなふうに勝手に想像しながら、一方では「それにしてもちよつと遅いな。」と心の緊張感がとれなかったもいた。そのとき急に反対の右手から物音一つ立てず、すうつと着物の男が現われた。いつ右手の唐紙が引かれそして閉められたのかまるで気がつかなかった。そして目の前に、私に斜めに半身を見せる角度で正座をする、何やら口の中で呟いた。挨拶であつたようだ。写真で知っている宇野浩二にまぎれもない。私はこの意表をついた現われかたに思わすひやりとした。直ぐに用件を告げると、自分よりもつと適当な人がいるだろう。だれだれはどうかなどと、余り歯切れのよくない口調で話すのだったが、通り一辺の話の受け答えをしているうちに、突如として浩二の口がまるで機関銃のようにとめどなく動き出しているのに気付いた。その声は低く抑揚がないのだが、ぼそぼそと独り言でもなく、かと言って私に向かってというふうでもなく、啄木の作品価値、その交遊関係といったものを実に微細に亘つてしゃべりまくるのだった。玄関の石畳に立ったままの私は、はじめのうちは適当に合いの手を入れていたが、しまいには疲れてしまつて碌々その話を聞いておれなくなつた。そして、彼の背後にある女神像にほんやり視線を投げて、その前に先ほどから三十分も経つたままも正座の半身像を少しも変えずに、ぼそぼそ喋っている日本の一小説家の姿に、言いようのない不思議な心の高まりを覚えていた。それは、彼のまわりにひしめいている多くの亡霊達——芥川

竜之介とか葛西善蔵とか、嘉村磯多とか牧野信一とか——を強く感じたからである。

宇野浩二は、その後、私に二度端書をくれた。はじめのは「解説の件はもう少し考えさせてくれ」というのであり、あとは断りののであつた。その字は大きく、実にのびのびとしており、あの常人とは明らかに違つた老人の筆蹟とはとても思えなかつた。

豊島与志雄のこと

終戦後の豊島与志雄のエッセーを集めて出そうということになり、原稿の整理もついていたが、出版事情で一時中断になっていた。半年ほどして、途中から私の担当になって再び出版する運びになった。初校のゲラ刷を持って、これも本郷の氏の家を訪ねた。黒っぽい着物をきた長身の豊島与志雄氏は、三角形を逆にしたような特徴のある容貌（悪く言えばカマキリのような）だったが、それでいて古武士を見えるような実に品の良い人であつた。出版がいよいよ軌道にのつたことを想像以上に喜んでいたので、小説家としての経歴も長く、その独特の感性の世界が知的に整理されて、珍しい清らかな作品を書いていた。中国との真の交友を念願していた氏は、そのエッセー集の中でも、日本の犯した罪をどのようにして贖わねばならぬかというふうなテーマの文章が多かつた。或る日訪ねると、先客があつて、二階の八畳間でその客と碁盤に向かつていた。いつも私に何かと氣さくに話をしていた氏が、このときは二こと三こと用件を話し終ると、もう二度と私の方は見ずに碁のとりこになつていた。節度正しい小説家とし

ての印象は揺がないが、そんな氏にもひとたび没頭したらそのことに耽溺してしまう性質を持っているのだな、とそのとき思った。画家に頼まないで、三日もかかって私が勝手に装幀もやったが、その出来栄が心配で、いよいよ出来上った本を持っていたとき何よりもそのことが気にかかった。しかし豊島与志雄は流産しなかった本が完成したことを純粹に喜び、装幀についても「なかなかいいね。」と言ってくれた。ただ名前の『豊』を『豊』としたことに不満を持ったようで、今後は注意してくれというようなことを呟くように言った。私は思わず顔を赤らめた。『文学以前』という本であったが、後記の中に「本書の中に、三木清と武田麟太郎と太宰治と、思い出が三つ並んだことについて、ことに私は感慨が深い。終戦の年の九月末と翌年の三月末とその翌々年の四月半ばに、この三人の畏友を相次いで失ったことは、何としても痛恨に堪えない。三つとも短文ではあるが、それは或るほかの文とを通じて、読者には恐らく分らないであろう私の執心が、本書には秘められている。」と書いてある。

井伏鱒二のこと

阿佐ヶ谷の井伏鱒二の家をはじめ訪ねると、平屋の小さな家だったが、何処となくゆとりがあって、完成した東洋の書画を見る思いがあり、氏の作品から受けるあの節度あるユーモアを生み出す家に似つかわしかった。玄關に出てきた奥さんから、井伏はしばらく故郷の広島の方に旅行していて帰るのは二ヵ月ほど後になるだろうと、丁寧に挨拶された。肌の白いや大柄の品のよい

方だった。話しぶりも落ちついていて、こちらの心を和やかにするふうであった。私は留守であったことよって感じるいつものあの徒労感のようなものを少しも感じず、かえってすがすがしい思いで辞することが出来た。三月ほどして再び訪ねると、この前と同じく奥さんが出てきた。奥さんは私の顔を見ると、すぐに、「××さん。この間はすみませんでした。今日は戻っております。」と言って奥に立った。多くの人が出入りする家なのに、ほんの二度めの私をよく覚えていてくれたものだと感じてしまった。六畳の書斎、といっても庭に向けて隅に小さな机を置いたまま本一つ置いてないその部屋は明るく落ちついていて、井伏鱒二は何か原稿を書いていたが、部屋に這入った私に、「しばらくそこで待っていてください。すぐ、これ、書き上げてしまおうから。」そう言う、横顔を向けたまま、太い万年筆を持って五六行書き足した。そのまま一度読み返すふうだったが、「よし、これでいい。」と言った思い入れで、机から私の方に向いた。奥さんに命じて、ウィスキーと、それから茶筒みたいなものを取り寄せ、これ郷里のものがと私の前に差し出した。みると、中にお好みがいっていた。それも東京辺りで売っているおかしやメリケン粉焼ばかりのものと違って、小蝦やら目玉のとれた小魚がたくさんあった。乾燥したその一つ一つの生物の死骸が、童画めいていて、ばかに美味かったのを忘れられない。ゆったりした氏の風貌は作品から受ける感じそのものであり、庭先の石に水がたまっていて、孟宗の竹が涼しげだった。